

彩の国 シェイクスピア・シリーズの 10年を振り返る

新たなステージを迎える SSS
(彩の国シェイクスピア・シリーズ)の今後のために、この10年の軌跡を演劇評論家の扇田昭彦さんに振り返ってもらった。

文=扇田昭彦(演劇評論家)

絶えず新しい挑戦を続けた 演出家・蜷川幸雄

1998年に始まった「彩の国シェイクスピア・シリーズ」(SSS)が、2007年で10年目を迎えた。話題作が相次ぎ、英国などへの海外公演も盛んに行われたこの10年の軌跡を振り返ってみよう。

このシリーズは、蜷川幸雄を芸術監督として、シェイクスピアの全戯曲37本を彩の国さいたま芸術劇場で13年がかりで完全上演しようという壮大な企画で、07年末までに18本が上演された。この中には、オックスフォード大学演劇協会(OUDS)の来日公演なども含まれるが、ここではこのシリーズの中心をなす蜷川演出の15本の舞台に的を絞ることにする。

この15本の蜷川演出は次の3種類に分けられる。

①新作の演出=『十二夜』『リチャード三世』



SSS 第3弾『リチャード三世』(1999年 大ホール)

『ペリクリーズ』『タイタス・アンドロニカス』『お気に召すまま』『間違いの喜劇』『コリオレイナス』『恋の骨折り損』

②過去に手がけた作品の新演出=『ロミオとジュリエット』『リア王』『マクベス』『ハムレット』『オセロー』

③再演作品=『夏の夜の夢』『テンペスト』

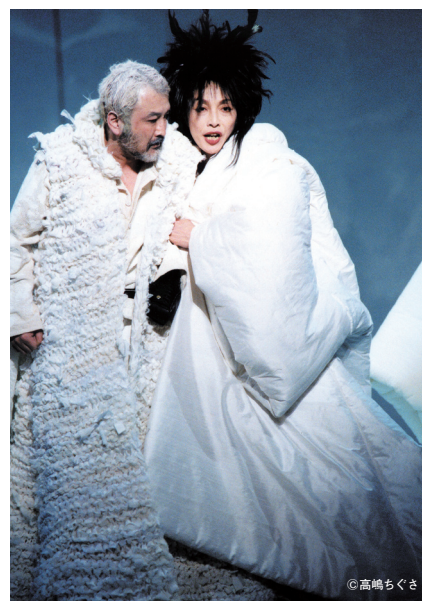
この分類から分かるのは、新作の演出が過半数の8本を占めること、過去に演出して評判を呼んだ作品でもあえて新しい演出で再挑戦する作品が5本もあること、そして再演が2本だけだということだ。ここからも、絶えず新しいものに挑戦し、繰り返しの避けようとする蜷川の熱い意気込みが伝わってくる。

忘れがたい、 特筆すべき舞台の数々

そこで①と②の中から、私にとって特に印象に残る舞台をいくつかピックアップしてみよう。

例えば、99年初演の『リチャード三世』は鮮烈な開幕シーンが忘れられない。舞台の奥から一頭の馬が駆けてきて、どうと倒れる。すると、舞台の上から戦場を象徴する馬や猪の死体、赤と白の薔薇の束が次々に落下してきて、舞台前面を埋め尽くしてしまう。観客の目を釘付けにする、いかにも蜷川演出らしい躍動感と視覚性に富む導入部だった。悪漢リチャード三世を演じる市村正親の、愛嬌と冷酷さが表裏一体となった演技も濃い魅力にあふれていた。

英国ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー(RSC)と共同制作した『リア王』(99年)では、和風の衣裳を着て水準の高い演



SSS 第13弾『タイタス・アンドロニカス』(2004年 大ホール)

技を見せる、名優ナイジェル・ホーソンをはじめとする英国の俳優たちが印象的だった。道化役で出演した真田広之のしなやかでクールな演技も光った。道化という存在の異質性とただ1人の日本人俳優であることがうまくマッチした役柄設定だった。

03年初演の『ペリクリーズ』は、これを現代の難民たちが語り、演じる一族再会の物語へと再構成した蜷川演出の解釈と趣向が斬新である。「戦乱」「難民」という、原作にない現代的な外枠を導入した知的な演出だった。イラク戦争の開戦が目前に迫る時点で上演されたこの舞台は、リアルな臨場感で観客の心をとらえた。内野聖陽、田中裕子、白石加代子、市村正親らの演技陣にも精彩があった。英国公演でも高い評価を得た舞台である。

04年初演の『タイタス・アンドロニカス』も忘れられない。復讐の連鎖が続くこの流血劇は、戦禍とテロが絶えない現代